

Title	ヴォルフ・ビーアマン 1982
Author(s)	野村, 修
Citation	ドイツ文学研究 (1984), 29: 1-31
Issue Date	1984-03-15
URL	http://hdl.handle.net/2433/184992
Right	
Type	Departmental Bulletin Paper
Textversion	publisher

ヴォルフ・ビーアマン 一九八二

野村 修

六月一七日

八年前の今日、ゲッティンゲンからここハンブルクに日帰りやってきて、ヴォルフ・ビーアマンの母、エマ・ビーアマンを訪ねたことを思いだす。息子と同様に小柄で、気さくで話しずきのかの女は、一緒にすごした三時間ほどのあいだ、話しに話した。なかでもほくの耳に残ったのは、かの女の夫、ヴォルフの父の、ダーゴベルト・ビーアマンについて聞いたことだった。

ダーゴベルトがアウシュヴィツで殺されたこと、その逮捕のきっかけとなったのは、かれがスペイン内戦時に、ヒトラー・ドイツからフランコ派へ送られる軍需物資の輸送を妨害するため、サポータージュ活動を組織したのが発覚したことであったことは、ヴォルフがどこかで書いている。エマ夫人から聞いたところでは、当時ナチ・ドイツからスペイン・ファランヘ党への武器援助は、まったく無害な貨物をよそおって、ハンブルク港などからこっそり積み出されていた。ダーゴベルトはヴァイマル時代にすでに、共産党員であることを理由に造船所から解雇されていて、その後も企業間に行きわたっていたブラックリストに名があったせいでもどこにも就職できず

にいたから、職場での直接のサポータージュを組織することはできなかった。かれはエマ夫人の弟そのほかの同志たちと協力して、軍需物資を送る船を探知し、その船名とか積荷とかの情報をフランスの同志たちへ伝える活動をおこなった。しかし連絡者のうちのひとりが、やがて裁判のときにわかるが、ナチのスパイだった。

かれは六年の刑を宣告された（そしてのちにアウシュヴィツへ送られた）。エマ夫人の弟のほうは釈放されたが、これには、ダーゴベルトと違ってユダヤ系の血がまじっていなかったことと、弟が法廷で絶対にハンブルク方言しか使わないという詭計を用いて、方言のわからぬ判事たちを煙に巻いたことが、あずかっていたのだろう。それにはいてダーゴベルトのほうはすでに一九三三年五月に、新聞に書いた記事が原因で逮捕され、二ヵ月の刑を喰うという、いわゆる前歴をもつてもいたのだった。

ハンブルク方言が判事にはわからなかった、というエマ夫人の話は、八年経つたいま、ぼくには少し具体的に腑におちてくる。というのは四日前、自主上映グループが運営している小さな映画館で、「ハンブルク蜂起、一九三三年一〇月」という映画が上映される機会がたまたまあるのを知って、観に行つたのはいいのだが、さっぱりわからなかったからだ。この映画は一九七一年に、なお生き残っていたかつての戦闘者たち数人にインタビューする、というかたちで作られている。いまは老いたかれら、かの女らの表情はなかなかよかつたし、ときどき混じえられる古い写真も興味深かつたけれども、語られていることはぼくにはさっぱりつかめなかつた。ほんの語学力がなっていないことはもちろんだが、話されたのが方言だったせいもあるのだろう。まあ、そう思つて少し納得することになっている。

八年のあいだに、ヴォルフ・ピーアマンの生活には激変が生じている。一九七六年十一月、一一年ぶりに出国

を許可され、一一年ぶりの演奏活動を西ドイツでおこなっていたかれは、DDR当局によって、その演奏旅行をDDRにたいする「敵対的な行動」と見なされ、DDRへの再入国を拒否されたために、西にとどまるほかはなくなった。その経緯と、DDR当局の措置にたいする国内・外の批判の動きとについて、ぼくは七六年末の時点での「中間報告」を、かつて書いたことがある（『京都薬科大学人文報告・一九七七』、七七年三月）。

ピーアマン追放の措置は、ついに撤回されることがなかった。DDR作家同盟の多数派が当局に最初から追隨しているなかで（わけてもベーター・ハックスの下劣な発言は、さすがにDDRのひとびとの眉をもひそめさせたらしく、多くの読者はかれのもとへ、かれの著書を返送したと伝えられている）、公然と当局に再考をもとめる声明を発した文学者たちも、かなり多くいたけれども、けっきょくこのひとたちも、有形・無形の非難と圧力にさらされて、あるいはベルント・イェンチュやライナー・クンツェやサラ・キルシュやウルゲン・フックスやユーレク・ベッカーのように西へ移ったり、あるいは意志表示を撤回する態度を見せたり、あるいは沈黙したり、することを余儀なくされた。この最後のひとたち——意見発表の場を奪われながらも姿勢を崩すことなく、DDRにとどまりつづけたひとたちの苦しい日々は、この日々にかかれたもののDDRでは刊行を拒否され、二年後（一九七九）に西ドイツで出版されたロルフ・シュナイダーの長篇小説『十一月』から、よくうかがうことができる。この小説中の作家は、構成された非難——ただ、ひとをくたくたにさせるだけか目的と思える、型どおりの侮辱と脅迫の手紙、電話、訪問——と、広汎な黙殺とに包囲されて、いらだちと無気力におちいつてゆくのだ。たまに会えばひとは、きみの意見は変わったかね、とか、あれはまずかつたんじゃないか、とか、人間でものは先が短かくなると、一度くらい言いたいことをいっておこうと思うんですかね、とか、かれ（小説のなかの

人物はかれではなくかの女に、つまり女流作家に、なっているのだが）に向かつてしたり顔をするのである。

話しを八年前の今日に戻すと、エマ夫人はゲッティンゲンに帰るほくを、ゲムトールア駅まで送ってくれた。駅周辺はヴァイマル時代とはすっかり様子が変わってしまったているが、この駅前の広場で一九二〇年に、独立社会民主党と共産党との合同集會があったのよ、とかの女はいった。かの女の父は第一次大戦の経験を経て一九一九年に独立社会民主党に加わり、この二〇年の合同大会で左派のひとりとして共産党に合流した。かの女自身はまだ一〇歳の娘のときで、そのかの女もこの合同大会から党生活を経験している。一九二三年のハンブルク蜂起のときは連絡員のひとりだった（あれは一揆でしかなかったわね、といまのかの女は批判的にいう）。駅の横手のガード下の、北東から南西に通ずるくぐり抜けの狭い道を、ほくらは歩く。二〇年の集會のあと、デモに出ようとしたら、武装警官隊に阻まれ、ぶんなぐられて、大通りを行けず、やむなくここをくぐっていったのよ、何千人ものわたしたちが。そうかの女はいった。

さて、今度ほくがハンブルクにしほらく住むことに決めた理由のひとつは、ここにいればヴォルフに逢う機会がつかめそうに思えたことだった。噂では、かれはここにいず、パリにいる、ともいうのだが。ほくはエマ夫人に手紙を書いて、ヴォルフの所在を尋ねてみることにしよう。

八月一日

昨夜ヴィーンから戻ったら、三日付のピアマンの手紙が届いていた。久しぶりにハンブルクへ帰って、手紙の山のなかに、母あてのきみの手紙を見つけた、会いたいから電話をよこせ、とあって、電話番号が記されてい

る。

電話してみる。聞いてみると、パリにいてという噂は別に嘘ではない。かれはパリにひとりだけの仕事部屋を、ここに家族と一緒にくらす家を持っていて、だいたい半月おきくらいに、行ったり来たりしているのだ。お互いの都合から、ぼくは九月なかばにかれを訪ねることにした。

八月二十六日

ピーアマンに会う前にここ数年のかれの仕事を知っておきたいと考えて、レコードを探してみた。かれの「追放」の直接の因となった七六年一月のケルンでの演奏会のライヴ・レコードは、ぼくは以前に友人の好意で聞くことができたので、探したのはそれ以後のものだが、見つかったのはつぎの四種類だった。

1 「何がどうあっても」、CBSレコード、一九七八年。冒頭のバラード「プロイセンのイカロス」は、かれがDDRで（おそらく最後に）書いたものだが、あとはほとんどが西で書かざるをえなくなつてからの作品のようだ。西側に腰をすえてそこから東を批判する、といった気やすい位置にはおちこみたくない、とつねづね語つていたかれらしく、かれはじぶんの状況を、じぶんをこの西でつつむ状況を、これらの歌で問題にしている。これらの歌は、このレコードと同年に刊行された詩集『プロイセンのイカロス』に収められており、ぼくはすでに読んでいる。

2 「人生の半ば」、CBS、一九七九年。レコードの題名となっている曲は、周知のヘルダーリンの短詩にピーアマンが曲をつけたもの。それだけでなく、このレコードでは他人の詩が多く利用されている。曲を付され

た詩の作者はレンツ、ハイネ、ブレヒト、ヴァン・ホディス、クーネルト、ノヴァーク、ヴァルラフ、ツァール、等々。これにたいし、ヴォルフ自身が作詞したものは、全二七篇の短い歌のうち、新作・旧作合わせて四篇にとどまる。

3 「一発かませろ、きみ」、二枚、CBS、一九八〇年。八〇年五月二五日のベルリン自由大学大講堂でのコンサートのライヴ・レコード。総選挙を控えたこの日々のために直接の意味をもつ反シュトラウスの歌、西ドイツ労働運動のための歌、などのアクチュアルな作品を中心としている。ほかに、なくなった友人ルーディ・ドゥチュケを悼む新しい歌や、「励まし」などのよく知られた旧作をもふくんでいる。

4 「これがわたしの人生なんだから」、CBS、一九八一年。このレコードを歌っているのはピアマンではなくて、かれの女友達のひとりで、かれのあとからDDRを離れたエーヴァ・マリア・ハーゲンである（ついでながら、かの女の娘ニーナは現在、歌手としてずいぶん有名らしい）。レコードの表題となっている歌は新作だが、旧作をかなり収めている。

早速、初めての歌をいくつか聴いた。一聴しただけの印象でいえば、ゴールレーベンの反核運動者たちのための歌、ドゥチュケを悼む歌、それにエーヴァ・マリア・ハーゲンのための「これがわたしの人生なんだから」とエーヴァ・マリアという」が、なかでもいい歌だと思えた。最後の歌には副題がある——「墮胎^なされ追放^なされる女のバラード」。

あのころ、わたしはかあさんのうすくらい
おなかのなか

かあさんは階段を跳んでおりたり
ねこいらすだか

タバコの吸いがらだかを煎じて嚙んだり

長いにんじんを

おなかのなかへ押しこんだり

していたわ。悲鳴を

わたしはあげた、でも声は誰にも届かなかった

かあさんは自転車の車輪の輻フをつぎに

ぶるる、わたしを突っつき出そうとして

入れてきた！ うすくらいおなかの奥に

でもわたしはまだ生きている

そういうぐあい、以前から

—— 悲しくないわ、ほんとの話し ——

ヴォルフ・ビーアマン 一九八二

これがわたしの人生なんだから

2

ポーランドの村からわたしたちは逃げ

雪だけで

ぬかるむ野を、かあさんはわたしを曳きずり

戦線をくぐり抜けて

西へ、ドイツ東部のノイルツピンまで

歩きに歩いた

ロシア兵たちが何もかもふんどり、何もかも

投げあたえていた

大汗を、安酒アッセルをもらったのは女性たち

ベーコンとパンをもらったのは子ども

よろこんでいた女ひともいたし、また

いたっけ、死ぬまで抵抗した女も

でも……

3

ブランデンブルク門のまえで

悲鳴があがる

ここでは戦車のために人間が人肉に

ひき肉になる

ああ、何がわかっていただろう

あの赤旗屋たちには

わたしの身うちの赤いハートについて！

何よりわたしは

若かった、生きようと熱望していた

そのとき戦車の列がたてた、きしる音を

そして踏みにじり、粉碎していった

わたしのいちばん美しい六月を

ヴォルフ・ピーアマン 一九八二

でも……

4

そう、わたしはきれいだったし、きれいだと
わかっていた

ひとびとを喰いものにするくらしを
おもしろがってもいた

豚どもとひとつベッドに寝たけれど

わたしはまだ

だからといって豚になってなんか
なかったわ。ただ

自問していた、どうしてこの一粒の麦は
熟れもしないうちに腐るのだろう

どうして人生は、ひとが物も分らぬうちに
ほとんど過ぎ去ってしまうのだろう

でも……

5

だけどわたしが口を開いたら、そのとたんに
つけられちゃった、けり！

スパイたち——ねずみたち——携帯用無線電話機
ヒステリー

縫われたわ、わたしの上下のくちびるは

有刺鉄線で

こうというのが労働者・農民国家なの

またなんで？！

わたしは追放された、墮胎されちゃった

国民の父といわれる連中の手で

わたしのよ様な人間の屑は棄てられる

連中の敵の足もとへ、目のまえで

でも……

6

ハンブルクは雨のなかでも美しい

一日だってわたしは

来たところへ帰りたいなんでもう

思わないわ

少しずつわたしは見抜き、わかってきてる

この世のなかのこと

余計ものの仔猫たちは水のなかに

放りこまれると

よいひとたちはあっちにもいるし

こっちにもいないわけじゃない——

その一方、どこだろうと、犬の

腐ったやつがいないところはない

でもわたしはまだ生きています

そういうぐあい、以前から

——悲しくないわ、ほんとの話し——

これがわたしの人生なんだから

九月三日

ピアマンの新しい詩集が出ているのを、行きつけの本屋の店頭で見つけた。『さかさまの世界——それを見るのがぼくは好きだ』、という表題がついている。

ぼくの行きつけの本屋はハインリヒ・ハイネ書房という。六七／六八年の学生運動の高揚のあと、西ドイツの大都市という大都市に、いわゆる左翼書店が簇生したが、ハンブルクもその例外ではなかった。ここには現在、一二店の左翼書店が数えられ、ハイネ書房はそのうちでは比較的新しい、しかし営業的にはずばぬけて成功しているといわれる書店である。構成人員は一二名で、店の運営は二週間ごとの全員の討議で決められ、各人の給料は同額だという。二つの店舗に多くの本を在庫させ、椅子を置いて自由に読ませてもいるから、客には便利だが、左翼書店仲間や学生たちからは「ハイネ・コンツェルン」と揶揄されている。

『さかさまの世界——それを見るのがぼくは好きだ』という詩集の題名は、詩集中の一篇「上げ潮のとき」のなかの二行でもある。

ヴォルフ・ピーアマン 一九八二

上げ潮のとき

海はおしあげてゆく

川を、内陸へ

アルトナでエルベの岸にぼくは座し

見た、ブイが東を差ししめし

川水が上流へのほりにのぼるのを

さかさまの世界！

それを見るのがぼくは好きだ

川が流れる、流れてゆく

もと来たほうへ！

エルベの水が

水の大衆がふたたび

ドレーステンをめざすのだ

帰ってゆこうと

これをぼくは見た、たのしく、だが平静に

そしてここにとどまる

この短詩は、D D Rへ戻れないままに数年を経たピアマンの気もちを、よく伝えて思うように思う。

詩集は四つの章に分たれている。第一章は「ひとびとについて」と題されていて、あのエーヴァ・マリーが、かれのなくなった二人の親友ハーヴェマンとドゥチュケが、アウシュヴィツの死者が、失業者が、ストライキでたたかう労働者が、パルティザンの戦士が、またヴォルフ自身の子どもたちが歌われる。いま引用した「上げ潮のとき」は、かれ自身を歌ったものとしてなのだろう、この章の最後に置かれている。

第二章「日常の泥のなかで」は、レコード「一発かませろ、きみ」で歌われた反シュトラウスの歌など。第三章「パリで」は、一転して私的な感情のこもる歌が多く、文字どおりパリで書かれたものと推察される。最終章は「ポーランドでは神が」という題をもち、八〇年夏以降のポーランド労働者の運動にたいする、作者の痛切な関心をあらわす歌（と散文）を集めている。

故人となった年長の友人ハーヴェマンのためには、その死に遭って絶句するほかはない気もちのにじむ散文が書かれているが、そのかたわらに、短い新聞記事の切り抜きが写真版で添えられている。これによるとピアマンは四月に、癌で死期の迫った友人を見舞うことができたらしい。D D R当局は、この訪問についてピアマンが誰にも口外しないこと、D D R国内でハーヴェマン以外の知人に会わないこと、を条件として、三日間の訪問を許可したのだった。ピアマンは公安警察にベルリンの東西の境界をなすフリードリヒ街駅で迎えられ、三日後に同じ場所まで送られた、とこの記事は伝えている。

ぼく自身、この三月には東ベルリンにいた。ハーヴェマン教授の家に近づくだけで警察に連行されるぜ、といった噂を聞いたりしたこともあって、ぼくは教授を訪ねなかったが、もうそのとき教授はずっと病床についていたのだろう。一三年まえ、ビーアマンと二人でスパゲッティのためのミートソースをつくりながら、傍観しているぼくを「男が料理ができなくて、女性解放ができるのかね」とひやかした教授の笑顔が、ぼくの眼前によみがえってくる。

九月一四日

ビーアマンを訪ねた。アルトナの先のホーエンツォルンリングに住んでいる。オッテンゼンの庶民街と、ブランケネーゼまで続く郊外の高級住宅街との、境いめのあたりだよ、とかれは電話でいっていたが、しかしこのあたりは閑静で緑が多く、ちょっと歩けばエルベ河畔におりてゆく広い芝の斜面もあって、すでにブルジョワの居住区を感じた。かれの家もかなりの敷地をもっている。

玄関を覗くと、「ぼくらは在宅している。客は庭のほうへ来て騒げ」、と貼り紙がしてあってにやりとさせられ、一三年前と八年前にかれをベルリン・ショーセー街のアパートに訪ねたとき、同じ階のひとたちに通ずる呼鈴がいくつか並んでいるうちのかれ自身のそのそばに、「ビーアマンを訪ねる者は、ビーアマンのベルだけを鳴らせ!」という貼り紙があり、にやりとさせられたことを思いだした。庭のほうに向かってぼくが「騒ぐ」と、庭への木戸口からヴォルフが顔を出した——八年前と同じ微笑を浮べて。

庭は芝生でしきつめられていて、ゴムまりとフットボール用のボールがころがり、座席の二つある双子のため

の乳母車がおかれています。そこに奥さんのクリスティーネと、二歳の双子のマリーとティルがいた。

ヴォルフとぼくは、その庭に向かうヴェランダの椅子に腰をおろす。家から六歳のペンヤミンが出てきて、おとなしく挨拶する。このひとがどこから来たか、あててごらん、とヴォルフ。ペンヤミンは地球儀を持ち出してきて、まずアフリカを、ついでラテンアメリカを指差しする。——違うなあ、電機製品をうんと売っている国さ。ペンヤミンは了解する。——ぼくらが初めて逢ったとき、きみは日本といえば魚料理と富士山とボルノグラフィーを考える、と聞いていたのに、いまは電機製品かい？——いや、今度出すレコードは会社のスタディオなんかでじゃなくて、ここで録音したんだけどね、そのために買った装置が日本製なんだよ。

その近く出るレコード（これはCBSでなく、小資本のムジカントから出る）は、「ぼくらは幸福のあまり狂わないわけにゆかない」という題をもっている。この題名は、かれが双子のためにそれぞれ一曲ずつ書いた子守歌、「マリーを歓迎する歌」と「ティルを歓迎する歌」の、マリーのためのほうの第一行から取られている。

ぼくらは幸福のあまり狂わないわけにゆかない

マリー、暗色の太陽よ、おまえを

こんな世界に投げだしてしまつて。

お眠り、オデブちゃんのマドンナ

お眠り、明るい夢をいだいて

ミルクの夢、うるおいのくちづけの夢、

ヴォルフ・ピーマン 一九八二

おまえはたちまちのうちにおまえの

揺りかごから出なくてはならないのだから。

これが第一連で、この子守歌は五つの連からできている。ただし最終連はこの第一連のくりかえしである。「オデブちゃんのマドンナ」という表現をヴォルフはじぶんで気にいって、きみはデブという語とマドンナという語が繋がっているのを、これまでに見たことがあるかい？ とぼくに問いかける。——いや、初めて見たよ。そして庭のマリーにぼくは眼を移す。父親に似合わず、まるまるとして大柄な感じのマリーに。

狂う、という語はここで、「狂喜する」といった意味あいだけで用いられているのでは、ない。「こんな世界」に生まれてきた子どもたち、自己破壊へ向かっている人類の列車に新たにぼくらが乗りこませてしまった子どもたちを思えば、ぼくらには、じぶんの頭髪をひつつかんでじぶんを泥沼から引きあげなくてはならない者の努力が、要請されてくるわけなのだ。

今度のレコードにはしかし、「一発かませろ、きみ」で目立っていたような、政治性を直接に表面に出した歌はない。反シチュトラウスの歌はよくできているんだけど、ああいうのは友人たちから歌ってくれと所望されることがないんだよ、とかれはいう。歌ってくれといわれるのは、そのなかにぼく自身が不安なく現われてきている歌、そのぼくを媒介に、個人的なものと社会的なものとが新しく独自の結びつきを見せている歌なんだ。古いものでいえば「愛の歌」というレコードに入れたたぐいの歌、ああいうものだね。今度のレコードはそれに近いたぐいの、新しいものを集めている。

かれはギターをとって「上げ潮のとき」を歌い、ついで、社会的なもの個人のもの繋ぐ「ぼく」が見やすいかたちで出現しているもうひとつの例というわけだろう、レコードにはまだ入れられていない「三人のバルティザン」を歌った。これは、ギリシャの内戦で反革命軍に捕えられ、残虐なしかたで殺された三人のバルティザンのことをものがたる、悲痛なバラードである。これはバラードとして始まるのだが、とかれは説明する、いわば終りが三度あって、第二、第三の終りが来ることによってバラードがリットに転換してゆく。この転換がこの歌では特徴的なんだ。

つまり第一の終り——これは第五連のまんなかになに不意に訪ずれる——で、ほんらいのバラードは語りおえらる。そのあとの四行（第五連の後半）では「ぼく」が、この話しを聞かせたギリシャの同志たちとギリシャの酒を飲み、ギリシャの料理を食べているうち、いつか三人のことを忘れてゆく。そのあと、メロディーが一転して、第三の終結部、独立した四行が来る。ここでは「ぼく」はすでにハンブルクに帰り、日常のなかにいる。が、たまたま「きみ」とギリシャ料理店にはいつてゆたかな食事をしたあとで、やわらかなベッドのなかで、あの三人の流した血が夢に現われてくる。

たしかに聴いていて、この三度の終止は効果的だった。ほんらいならどんなバラードも、このような「ぼく」（書き手、歌い手、聞き手）の介入による転換を内在させているはずなのだけれども、ときには、それをあえて明瞭の外に出して見せるのもわるくないな、とぼくは思った。むしろその転換が生きるためには、介入する「ぼく」が、バラードの内容に恥ずかしくなく介入してゆけるだけの内実をもっていなければならぬだろうが。

このレコードのつぎの予定をたずねると、かれは来月半ばから二月初めにかけて、二年ぶりに西ドイツのほとんど全域を廻る演奏旅行に出る、という。大小二六の都市でコンサートをひらくのだ。そのあと、ポーランドに関連する歌を集めたレコードをつくりたい。来年秋にはアメリカに行くだろう。オハイオ大学で半年間講義するよう、呼ばれているからだ。かれにいわせると、西ドイツに住むことを余儀なくされてどのように生きるか、という「宿^{ハのネアウフカールベン}」の答えを出すのに六年もかかったけれども、それもなんとか片づいた。だからもうかれは遠くへも、日本へも、機会があれば行くだろう。

散歩に出る。緑地を抜けてエルベ河畔へおちる。河口までまだ数十キロはあるはずだが、ゆったりしたエルベはこのあたりでも、かれの詩にあるように、満ち干きをくりかえしている。大洋へ通う船がつきつきと眼前を過ぎてゆく。向こう岸には貨物用の大きな埠頭がいくつもいくつも連なっており、こちら側、ぼくらの眼のまえには、ノイミューレンの棧橋がある。——そういえば、かれが西へ来てから出した最初の詩集『プロイセンのイカロス』(一九七八)の「まえがき」のなかで、かれはここへの散歩のことを書いていた。

しかし、港の水のにおいはなんといふことか！ ぼくはDDRにいたとき、西には少しもあこがれなかったが、いつもハンブルクにあこがれていた。いや、ハンブルクにというより、この水のにおいに。船のスクリューが川をかきまぜると、泥や腐った魚、タールや潮風やディーゼル油のにおいがたちのぼる。少年時代のぼくがうっとりしたにおいだ。五分ばかり歩いてノイミューレン河岸に出れば、そこには曳き船がたむろしていて、ぼくは存分にそれをかける。そればかりではない。ストライキのときなら、ぼくは港湾労働者たちと会話

ができる。するとぼくは、まだ書いていないバラードを思いだす、共産党员カール・ディートリヒのバラードを。かれはモイメばあさん〔ピアマンの母方の祖母〕の息子で、ナチの監獄を生きのび、保護観察に移されて東部戦線へ送られ、それでも生きのびて赤軍側へ脱出し、こういった——同志たち、おれだよ、ハンブルクの共産党员だ、と。ところが同志たちは信用せず、かれをぶちのめした。かれはさらに収容所を生きのび、戦後になって帰郷した。かれは港でまた仕事を見つけ、五一年の大ストライキを組織した。そしてクビになり、「あばら家」住まいにおちぶれた。かれが最後につかまえた仕事は、スペインのぼろ船からクラブクレーンでチコリを荷おろしする作業だった。会社がけちで作業は甲板員ぬきだったので、ぼくのカーリ叔父さんはクレーンの大きな鉄の口にはさまれ、ぶらさがった。そしてモイメばあさんの手が、あのタイルばりの地下室で、紙の経かたびらをととのえたのだった。家庭の些事が、このように階級の歴史と交錯するところには、一篇の歌がひそんでいる。たぶんほかのひとたちにも役だつ歌が。

ハンブルク。そう、ぼくはここ異国にいても、ふたたび故郷にいる。ハインリヒ・ベルはうまいことをいった、きみは故郷へ追放されたんだ、と。

かれの二篇のみごとなバラードに活写されたモイメばあさんには、ぼくは一九七四年のハンブルク訪問のときに逢うことができた。高齢で、そのときにもう寝たきりだったかの女は、その後なくなった。かの女の娘でヴォルフの母のエマ・ピアマンは、むろんまだ元気である。以前の家の家にひとりで住んでいるが、ちよくちよくここへ来るよ、とヴォルフはいった。

きみが生まれて育ったのはどのあたりなんだ、とたずねたら、ハマープロークだ、とかれは答えた。このこと同じくエルベ川に近いが、都心からいえばことは逆方向、東のほうになる。いまはそのあたりは家が少ないが、戦時中までは労働者の居住区だった。当時は無数の堀割が縦横に走っていたけれども、いまはたいてい埋めたてられてしまったね。空襲で焼野原になり、それ以来変ってしまったんだ。あのときはたくさんのひとが焼け死んだ。大火事ときには四周から強風が吹きこむから、ひとびとは風に追われて焔に巻かれる。風にさからって逃げねばならないのに。そんなことをかれは話した。

川ぞいに西へ歩く。「博物館港」という名の小さな棧橋があって、古い帆船などが何隻か繋留されている。昨年かれは、知人のもつ三本マストの帆船に乗り組んで、北欧へ数カ月の航海をしたそうだ。——さらに西へ歩く。みちみち、かれは知ったひとに出くわすと、あるいは知らないひとからでも声をかけられると、気さくに、陽気なことばをかわした。見ていて、ひとの心をつかむ才がかれにあるのが、よくわかる。川をのぞむ喫茶店の二階で一休みし、かれの家に戻る。二時間ほど歩いたろうか。

一〇月七日

『ターゲスツァイトゥング』紙の記事によると、一〇月五日のマールブルクの文学祭に、「七六年グループ」という名はないが、そう呼んでよさそうなグループが集まった、という。というのは、招かれて出席した二〇人以上の文学者が、DDRから移ってきたという点で共通性をもっているだけでなく、そのうちのかんりの数が、一九七六年にヴォルフ・ビーアマンのためにDDR国内で声をあげて投獄され、西へ移ることに引きかえに出獄

してきているひとたちだからだ。かれらがこうむった刑期を合算すると、一〇〇年をこえるとのことである。
出席した作家はピーアマン、ユルゲン・フックス、ライナー・クンツェ、ヘルガ・M・ノヴァーク、ゲルハルト・ツヴェレンツなど。

一〇月九日

晶文社の社長の中村さんから、画家の平野さん（晶文社のほとんどの本の装幀者でもある）と一緒にフランクフルトの書籍市へ行くので、きみも来ないか、といわれていたので、ミュンヘンからの帰途にフランクフルトに立ち寄った。

キーペンホイアー・ウント・ヴィツチュ書店の展示場のそばを通ると、若い連中が十数人むらがっていて、いわゆる人間の糸玉ができています。そのなかを覗いた平野さんが、なかにいるのはピーアマンじゃないか、という。そこで外から背伸びして顔を出したら、かれは目ざとくほくを見つけ、「やっど！」といった。なんで「やっど」なのかわからないが、かれのほうでは、ほくも物見高い日本人のひとりだから書籍市には現われそうだと踏んでいたのだろうか。

中村さんと平野さんを紹介する。中村さんについては、「ほくの本のような売れない本を出すひとにしてはふとっているので嬉しいね」、平野さんについては、その風貌が印象的だったのだろう、「ほんとに日本人？」というの、かれの最初のことばだった。平野さんが本の装幀をすることを話すと、かれはかれの今度の本の表紙や本文の各所を飾っているイラストについて、たのしそうに説明したうえ、展示棚から「盗んだ」一冊を——と

いうのは、この書籍市では本を売らないのが規則だからだ——平野さんに贈った。

今度の詩集にちりばめられたイラストは、たしかにおもしろい。かれの友人ペンクの素描、グランヴィルとポサダの版画、それにスペインの古い絵草紙からの何枚かの絵。最後のものはかれの詩集の題名どおりの「さかさまの世界」をえがいていて、鳥籠にはいった人間を外から鳥が眺めていたり、豚が人間を料理していたり、人間が大鎌を振りかざして死神を追いかけたりする。

一〇月一九日

二年ぶりにレコードを、四年ぶりに詩集を出し、やはり何年ぶりの演奏旅行を始めたビーマンにたいするインタヴューが、今日の『ターゲヌツァイトゥング』紙に載っている。そのなかで、「西へ来てあなたの生活感情は変わりましたか」、と記者に問われたときの、かれの答え——

ほくは妻のティーネに、ほくが西へ来て変わったと思うか、と聞いてみたことがある。かの女はちよつとシャクにさわる答えを返したよ、「東にいたとき、あなたはもつと陽気だったわ」。としを喰ってもいまだに学びつづけていると、ひとは、すこし賢くなるという不幸をもつんだな。

このかれのことばは、ほくにはよく腑におちるように思える。東ベルリンで会ったとき、かれは、ちようど失恋の時期にいた一回だけを除いて、いつでも陽気だった。公的に人前で歌うことも、作品を印刷することも許されていなかったにしても、かれが友人たちのあいだで歌えば、歌はひとつてに確実に伝播してゆき、さまざまな反響をかれに返してきていた。社会主義の、DDRの、より人間的な未来への発展をかれは確信していて、その

内部にあつてかれなりに最善の仕事をしていると、自信をもつこともできた。西へ移ることはまるで考えていなかった——親しい年長の友人、先ごろなくなったあのローベルト・ハーヴェマンと同じように。

そんなかれにとつて、西にとどまるのを余儀なくされたことは、つらいことだったろう。同じインタビューで、かれはつぎのようなことを語っている——

最初二年間、ぼくはDDRへ帰ることのほか何も望まなかった。ここで、部屋に閉じこもらずに公衆のまえで歌え、本を出せるのはいいことだけれども、それでも帰りがたかった。なぜならあちらでは、ぼくが必要とされているという感じ、ぼくには有益なことができるという感じをもてたからね。ここではそれが持てずにいた。あちらにいたときには、ぼくはこちらのことがかなりわかっているつもりだった。ドウチュケはじめ、こちらから来た多くのひとと議論もしていたし。しかしここへ来て、ぼくはここをあまりにも知らないことを痛感した。ひとつの社会をつかみ、触れ、嗅ぎ、味わうには時間がかかるよ。いまぼくはポーランドのことを歌うが、ポーランドでいま起きていることは、しかし、ぼくにはとても身近だ——それは、ぼくのDDRでの二三年間の生活と響き合ってくるからね。

たしかに、西へ住んでからのかれの仕事、とくにその初めのころのものは、すでに東ではなく西の政治・社会状況のなかでつきあたる問題を問題として、それに内部から立ち向かっているものの、どこかしら、それになじみきれずにいる者の苦渋をにじませているように思われる。でもそのことは、つらいにせよ、わるいことではないだろう——つねにどこかなじめぬ感じをおぼえながら、なお状況のなかへ、その核心へ分け入ってゆかざるをえない、ということ。

一〇月二四日

晩の八時から大学の大講堂で、ピアマンの演奏会。この一六日から一カ月半にわたって西ドイツ各地を廻る演奏旅行の一環である。かわきりの一六日はハノーファーでの公演だったが、新聞記事によると入場券は早くから売り切れていて、一二〇〇人が会場を埋めた、とあった。かれの人氣は根強いとみていいのだろう。ハンブルク大学の講堂は二千人はらくにはいると思える広大なものだけでも、座席はもちろん通路も壁際も、さらに舞台上の一部までがひとで埋まった。聴衆はほとんどが若者の感じで、ちらほらと中年がまじっている。

休憩一五分をはさんで一時半まで、ピアマンは歌い、語り、朗読し、議論した。コンサートは二時間、という普通の尺度はかれにはあてはまらない。数人の友人たちのあいだで歌うとき、数千人をまえにしているかのように歌い、数千人をまえにしても、親しい数人をまえにしているかのように歌う、とかれは友人たちからいわれ、じぶんでもそう自認しているのだが、そのことばは嘘ではなかった。かれならば千一夜でも聴衆を飽かせないだろう、というある批評家の文章も、さほどおおげさではない。何時間もひとびとはくつろいで、かれの歌と談論をたのしむ。

ホールの照明は明るいままだ。たぶん演出なのだろうが、最初ちょっと暗くなり、いや、みんなの顔が見えるほうがいい、というかれの要求を受けて、すぐまた明るくなるのである。舞台上にまではみだしている聴衆のなかには子どもたちもいて、そのなかには、かれ自身の子どもたちもいるように、ほくには思われる——少々距離があつたので確認はできなかつたけれども。ときにかれらが動きまわることも、ここの雰囲気の中までは邪魔で

はなく、かえってひとの気もちを和ませている。

この晩ピーアマンが歌った歌は、当然ながら新しいものが多かったが、ぼくらにすでになじまれているものもいくつか混じえられていた。たとえば「兵隊兵隊」、「励まし」、「そうするさ——そうなるさ」、「チリ。カメラマンのバラード」など。この四つのうち三つを一九六九年に、そして最後のひとつを一九七四年に、ぼくはベルリン・ショッセー街で、あるいはひとりきりの聴衆として、あるいはローベルト・ハーヴェマンとたまたま一緒に、あるいはまた別の幾人かと同座して、聞いたことがある。

いや、それだけではない。あるときはよくはこのバラードをすでに訳出していて、その訳詩が、カメラマンにびたりと銃口を向けているチリ反革命軍の一兵士の写真とともに、載っている『思想運動』紙をかれのもとへ携えてゆき、そしてかれは早速それを切り抜いて、かれの部屋の壁に貼ったのだった——アウシュヴィツで殺されたかれの父の写真や、チェ・ゲバラの写真などと並べて。

チリ (カメラマンのバラード)

同志たち、いってくれ、誰か憶えてないか？

せめて誰かひとり？　ひとりはいるだろう

かれの名を憶えている者が。そしてどこで、いつ
かれが死んだかを。あのチリのカメラマンが！

ヴォルフ・ピーアマン 一九八二

サンティアゴで、あの流血の年に
じつに多くの、多くのひとが倒れた
そのチリでだった、ひとりの男が
殺されながら殺し屋を撮影したのは

ああ、権力はこぶしから出る
やさしい顔からは出ない

じじつ銃口からだ、権力が

出るのは、口からじゃあなくて！

同志たち、それは明らかなこと

真理だ、いつまでも真理だ

それはにがい真理だ

UNIDAD POPULARの

その映画はほくらには教訓的だ

兵隊の仕事が見てとれる——殺人が

ぼくは見た、誰にもわかるその映像を

生きようとして舗道を駆ける民衆

そしてその街頭を銃弾が掃いてゆき

プロレタリアをなぎたおす

ぼくは見た、撃たれて倒れる子どもたち

死んだ子に身を投げかける女たち

きみには見える、とりわけあいつ

鉄かぶとをかぶり、自動小銃を使ういぬ

いぬはその銃身をあごにあて

時間をかけてねらう、ねらう……

カメラマンがびたつとやつにカメラを向けると

やつもびたりとカメラに照準を合わせてくる

その映像がゆらめく、映画はとぎれる

——これだ、ぼくが見たものは

ああ、権力はこぶしから出る

ヴォルフ・ビーアマン 一九八二

ヴォルフ・ビーアマン 一九八二

が、やさしい顔からも！

じじつ銃口からだ、権力が

出るのは、でも口からも！

同志たち、これは明らかなこと

真理だ、いつまでも真理だ

これは貴重な真理だ

UNIDAD POPULARの

銃弾は銃身から出た

カメラからは出なかった！

そしてほくらの闘争はつづく

この映画がとぎれるまさにその場で

銃をもち、またギターをもって

同志たち、これは明らかなこと

これこそが完全な真理だ

UNIDAD POPULARの

近作から歌われたのは「三人のバルティザン」、「失業」、「上げ潮のとき」、「パリの暖炉の火」、「アダム・ザガイユフスキー」（これはポーランドの詩人ザガイユフスキーを思ふ散文で、朗読された）、「マリーを歓迎する歌」、「ティルを歓迎する歌」、「これがわたしの人生なんだから、とエーヴァ・マリーはいう」、など。アンコールのときには当のエーヴァ・マリーも舞台にあがって、パリ・コミュニンの追憶の絡むあのシャンソン「サタン・セックス桜桃の季節」——これをヴォルフは今度じぶんでドイツ語に翻訳している——を、ヴォルフと交互に歌ったりもした。

このコンサートの主催者はハインリヒ・ハイネ書房。都市ごとに主催者は変わるのだろうか。とにかくハンブルクでの場合、主催者へはいる収入はパレストイナの子どもたちの救援にあてられる、とぼくは聞いた。

* 「売れない本」とピーアマンがいったのは、ぼくの訳した『ヴォルフ・ピーアマン詩集』（一九七二、晶文社）が干部しか出なかったことを、ぼくから聞いていたからである。西ドイツではかれの本は「売れない本」ではない。かれの第一詩集『針金のハーブ』（一九六五）の発行部数は、拙訳の出た七二年の時点で、すでに七万部だった。この数字は、詩が日本でよりもよく読まれるドイツにおいても、記録的である。